みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Tadao Umesao’s Sketch Materials from his Fieldwork in Inner Mongolia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003856

梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料（国立民族学博物館研究報告 37 巻 1 号）

正　誤　表

頁	行	誤	正
104	下から4行目	西スニト	東スニト
105	写真 2 キャプション	西スニト	東スニト
106	写真 3 キャプション	西スニト	東スニト
106	写真 4 キャプション	西スニト	東スニト
107	写真 6 キャプション	西スニト	東スニト
107	写真 7 キャプション	西スニト	東スニト
110	写真 10 キャプション	東ウジムチン	西ウジムチン
110	写真 11 キャプション	西スニト	東スニト
111	写真 12 キャプション	東ウジムチン	西ウジムチン
111	写真 13 キャプション	西スニト	東スニト
111	写真 14 キャプション	西スニト	東スニト
112	写真 15 キャプション	西スニト	東スニト
113	写真 16 キャプション	東ウジムチン	西ウジムチン
113	写真 17 キャプション	東ウジムチン	西ウジムチン
114	写真 18 キャプション	西スニト	東スニト
114	写真 19 キャプション	西スニト	東スニト
115	写真 20 キャプション	西スニト	東スニト

国立民族学博物館研究報告37(1): 91-122 (2012)

研究ノート

梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料

小長谷有紀*

Tadao Umesao's Sketch Materials from his Fieldwork in Inner Mongolia

Yuki Konagaya

国立民族学博物館の創設に尽力し，初代館長をつとめた梅棹忠夫は，1944 年から 45 年にかけて現在の中国内モンゴル自治区で現地調査を行い，多くの資料をのこした。それらの資料のうち約 200 点のスケッチは，当時の物質文化に関する優れた民族誌資料となっている。本稿では，共同研究の成果にもとづいて，オリジナルな資料の概要を紹介し，変容しつつある現在から歴史的価値を確認する。

Tadao Umesao who devoted himself to founding the National Museum of Ethnology in Japan and was its first director, undertook fieldwork in Inner Mongolia during his youth, from 1944 to 1945. He left many files and documents and about 200 sketches, which are regarded as good materials for ethnography. In this report the author outlines this original material based on joint international research and confirms its historical value for material culture studies from the point of view of presented day fieldwork.

*国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words：Tadao Umesao, Inner Mongolia, material culture, sketch
キーワード：梅棹忠夫，内モンゴル，物質文化，スケッチ

1　はじめに
2　スケッチ資料の概要
3　梅棹スケッチ資料の特徴
4　スケッチ資料におけるモンゴル語
5　スケッチ資料にえがかれた物質文化の現在
5.1　使われつづけている場合
5.1.1　素材の変化とそれにともなう使用法の変化
5.1.2　素材の変化にもかかわらず維持される地域差
5.1.3　商品化による維持
5.2　使われなくなった場合
5.2.1　博物館化とおみやげ化
5.2.2　用途のさまがわり，あるいはそれ自身の博物館化
5.2.3　機械化による置換
6　おわりに

1　はじめに

国立民族学博物館の創設に尽力し，初代館長をつとめた梅棹忠夫は，戦後の日本における文化人類学の興隆期をになう一人である。その業績は多岐にわたるなかで，詳細な観察データにもとづいた研究論文をいくつも執筆しているという点で，その研究の原点はモンゴルでのフィールド・ワークにあるといっても過言ではあるまい（小長谷 1990: 639–657）。調査がおこなわれたのは現在の行政区域名称でいうと中国内蒙古自治区（以下，内モンゴルと略す）である。

1944 年当時，蒙古自治邦の首都である張家口に，衛生および教育面での政策実施をになっていた財団法人蒙古善隣協会によって，西北研究所が設立された。所長には今西錦司，副所長には石田英一郎が着任し，12 名の研究員を擁した。梅棹忠夫は当時，弱冠 24 歳で，もっともわかいメンバーの 1 人であった。梅棹は 5 月に渡航し，6 月には粛親王府北牧場におもむいて乗馬とモンゴル語の練習にとりくみ，本格的な調査の準備にいそしんだ（梅棹 1990b: 24 など）。そして，ようやく 9 月から翌 45 年 2 月まで，草原へのエクスペディション（以下，遠征と称す）がおこなわれた。この遠征に参加したのは，今西錦司，加藤泰安，酒井行雄，中尾佐助，和崎洋一，梅棹忠夫の 6 人である。内モンゴルといっても，現在の，河北省に属する張家口からシリンゴル盟のチャハル地方ならびに東西スニト旗地域での調査であった。

梅棹が 2010 年 7 月 3 日，90 歳で没すると，膨大な資料がのこされた。それらの資料は現在，国立民族学博物館において保管されており，「梅棹アーカイブズ」とよば

れている。すでに登録が済んでいるものとして写真およそ 35,000 点，未登録のものとして，スケッチ・ブックおよびスケッチおよそ 300 点，フィールド・ノートおよそ 200 冊，梅棹自身が「一件ファイル」（梅棹 1993: 488）という名称で言及している書類ファイルおよそ 18,000 点，カード無数などがある [1)]。

これらのアーカイブズ資料のうち，内モンゴルでの調査に関するものは，スケッチ約 200 点，フィールド・ノート約 50 冊，写真約 100 点，ローマ字カード約 2,000 点，地図 3 点，原稿約 1,000 枚などである。

現在，国立民族学博物館の共同研究「梅棹忠夫モンゴル調査資料の学術的利用」（2011 年 10 月から 2 年半の予定）において，それら資料の分析をおこなっている。それらの資料のうち，スケッチについては，記載された内容を確定し，また現状と比較するため，2012 年 5 月，「館長リーダーシップ経費」を申請し，その資金によって現地調査を実施した。本稿は，その成果にもとづいて，梅棹のモンゴル調査資料のうちスケッチについて，共同で研究した成果を利用しながら資料紹介をおこなうものである。

2　スケッチ資料の概要

本稿でスケッチ資料とよぶのは A5 判の画用紙にえがかれたものである（本稿図 1 参照）。これらについて，梅棹自身は「それはわたしの民族誌写真の先行形態であったのだ」（梅棹 1992: 555）とのべているように，フィールド・ワークにおける記録の一種として重視していた。これらの多くは，著作集の編集時にひとたび点検され，梅棹忠夫著作集第 2 巻『モンゴル研究』の「モンゴル遊牧図譜」（以下，「図譜」と略す）にもちいられて刊行されたことがある。この「図譜」はまた文庫本『回想のモンゴル』（梅棹 1991）にも所収され，普及している。そこで，このときの図の番号をもちいて，資料の概要をのべることとする。

なお，「図譜」の解説において「わたしは自分でそのかなりのものをケント紙にうつしとり，墨をいれて，印刷できる下図を作成した」（梅棹 1990b: 562）とあるように，もとより，梅棹みずから清書していたものもある（以下，梅棹製図とよぶ。本稿図 2 参照）。梅棹製図について，本稿ではスケッチ原画にふくめないこととし，リストにその有無をしめしておく（表 1 参照）。また，うつしとるときに左右反転したものがあるので，それについても記号でしめしておく。

「図譜」は，項目を設定し，その説明に際してスケッチを利用するというかたちで

口述筆記された。図 1 から図 106 まで 106 点の図が掲載されている。これらの図は，梅棹製図のあるものについてはそれらが転載され，ないものについては著作集の編集に際して出版社によってトレースされた。

そのうち，図 3，図 11，図 13，図 21，図 22，図 30，図 31 の 7 点についてはスケッチがなかった。それぞれ移動式住居の内部，全身の衣服，帽子，玩具として利用するヒツジのくるぶしの骨，馬頭琴，ヒツジ肉の盛り合わせ，刀と箸の銀製装飾品である。これら 7 点はいずれも，解説にあわせて，国立民族学博物館に所蔵される標本資料などを利用して作図されたものである。

これら 7 点をのぞく 99 点についてスケッチの原画がある。ただし，そのうち，和崎洋一のえがいたものが少なくとも 3 点ある。図 1 の宿営地風景の原画は，その日付の記載のしかたから和崎によるスケッチではないかと思われる。また，図 7 および図 95 の原画にはローマ字で「WAZAKI」あるいは漢字で「亘」というサインがある。それぞれ，天幕の内部，ラマ廟風景である。

これら 3 点をのぞいた 96 点について，梅棹によるスケッチ原画があるといえるけれども，そのことがただちに 96 枚のスケッチがあるということにはならない。なぜなら，複数のスケッチが「図譜」では 1 枚に統合されたものがある一方で，1 枚のスケッチが「図譜」では複数の図に分割されたものもあるからである。また，解説がほどこされないまま「図譜」にもちいられなかったスケッチもある。さらに，1950 年代に書かれた論文に使われた図版の原画スケッチもある。そうした概要について，以下にしめしてゆく（表 1 参照）。

まず，1 枚のスケッチを複数の図にしたものが，図 99 から図 102 までの一連のフェルト製造に関する道具類である。4 点の図に分解されているが，もとのスケッチ（以下，原画と称す）は 2 枚である。

また，タイプの異なる家畜小屋をあらわした図 66 と図 67 は，もとより，ほぼ清書されて 1 枚の原稿用紙に貼りつけてあった。論文に掲載する目的でみずから清書していたと思われる。原画として 2 枚のままとみなすことにする。

さらにまた，図 44（灰をかきだすための小さなシャベル）は，論文「乳をめぐるモンゴルの生態 III」の図 11 の原画から切り分けられたものであり，梅棹みずからにより製図されていた[2)]。

一方，複数のスケッチを 1 枚の図に編成したものとして，以下のものがある。

図 23 の臼と杵はもともと 2 枚の原画であった。図 53 の大工道具類はもともと 3 枚の原画で，いずれも道具類は整然とならべて清書されていた。

さらに，図 55 というひとつの番号のもとに，家畜囲いのタイプの異なるものとして 5 枚の図が掲載された。さきの家畜小屋と同様に，梅棹みずから 4 つのタイプを 2 枚に清書し，原稿用紙に貼りつけていた。したがって，原画として 4 点である。編集時にくわえられた 5 枚めの原画は，和崎によるスケッチであり，しかも 2 番めの家畜囲いときわめてよく似ているので，梅棹が清書する際，すでに和崎のスケッチを参照したのかもしれない。

また，図 81 と図 82 の鞍については，いずれも原画は 2 枚のスケッチだったものがまとめられている。図 105 の鉄砲については，全体と部分とに分かれていて，原画も 2 枚ある。

以上のように，「図譜」の図にもちいられたもののうち，編集の際の分割と統合などの関係をもとにもどすと，梅棹スケッチ原画は 102 枚となる。

つぎに，解説がほどこされないまま「図譜」にもちいられなかった原画は 6 枚ある。図 72 から図 74 に関連する，牛車の部品の名称に関するスケッチ，図 95 の固定施設に関連するといえなくもない，柵のスケッチ，門柱のスケッチ，図 99 から図 102 に関連する，フェルト製造機のスケッチ，そして革なめし道具に関するスケッチと，革細工のための道具であると思われるスケッチ，以上の 6 点である。

つづいて，論文にすでにもちいられた図のもととなった資料ものこされており，そのうち地図や模式図はのぞいて，スケッチとみなしうるものについて解説をくわえておこう。

梅棹は 1946 年に中国から帰国し，その後，内モンゴル調査でのデータにもとづいて以下の 8 件の論文を刊行した。刊行順にしめすと，「ラクダのはな木」「ウシの口がせ」「乳をめぐるモンゴルの生態 I──序論，および乳しぼりの対象となる家畜の種類について」「乳をめぐるモンゴルの生態 II──乳のしぼり方，およびそれと放牧との関係」「モンゴルの飲みものについて」「ボドとシュトッス」「草刈るモンゴル」「乳をめぐるモンゴルの生態 III──モンゴルの乳製品とその製造法」である。いずれも『モンゴル研究』に所収されており，書誌情報などの詳細は著作集を参照されたい。

これらのうち，「ラクダのはな木」と「ウシの口がせ」は，著作集の編集時，梅棹がみずから「図譜」の一貫とみなしたものである。初出論文「ラクダのはな木」には図 1 から図 4 までの 4 点の図が掲載されており，このうち図 1 についてはもとのスケッチが 1 枚あり（表 1 の補 22），図 2 から図 4 については 2 枚の清書がある（表 1 の補 23，24）。「ウシの口がせ」には番号のない状態で 4 点の図があり，これらは 2 枚の清書としてのこっている（表 1 の補 25，26）。これらはいずれも梅棹本人によっ

て清書されたものとみてまちがいない。

なぜなら，「ラクダのはな木」については，フィールド・ノート 13 番の 12 月 23 日の記録のなかに，はな木に関する図解説明と考察があり，すでに論文の草稿ができあがっており，「ウシの口がせ」については，フィールド・ノート 12 番の 12 月 17 日の記録のなかに，図解説明とともに考察がしるされており，すでに論文の草稿となっているからである。

梅棹は 1945 年 8 月に張家口をひきあげて，しばらく天津に滞在し，12 月に北京へ移動してから，1946 年 5 月に帰国した。もちかえられた資料のなかに相当量の論文草稿があることから，帰国までの半年間に早くも本格的な論文の執筆に着手したことは確実であり，おそらくおおくのスケッチの清書もこの時期におこなったと思われる。

上述の論文のうち，「乳をめぐるモンゴルの生態 I」「モンゴルの飲みものについて」および「ボドとシュトッス」にはもとより図版がない。「乳をめぐるモンゴルの生態 II」には桶のスケッチ 1 点が掲載されており（表 1 の補 15），「乳をめぐるモンゴルの生態 III」には乳製品道具類のスケッチ 15 点が掲載されており（表 1 の補 1 から 14 まで），「草刈るモンゴル」には鎌 2 点（表 1 の補 16，17），草用熊手 1 点（表 1 の補 18，表参照），乾草おき場の事例 2 点（表 1 の補 19，20）が掲載されている。これら 21 点はすべて原画として 21 枚がのこっている。

ただし，「乳をめぐるモンゴルの生態 III」の図 3 にもちいられた屋内風景と，「草刈るモンゴル」の図 9 にもちいられた乾草おき場について，のこされている原画は和崎によるスケッチである。そこで，梅棹スケッチ原画としては 19 枚と計上される。

以上のように，いまのところ総数として 132 枚のスケッチ原画が確認された。今後，資料の全容が解明される過程で，さらに増える可能性はある。

たとえば，「有蹄類動物之生態学的研究」と箱書きされた 11 点の箱には草稿類がおさめられており，そのうち「第五冊」には家屋の配置などに関する論考がおさめられている。そのなかには 50 点ほどのスケッチや図面，地図がふくまれる。これらのうちスケッチについては和崎のサインのあるものがおおく散見されるので，本稿では割愛する。詳細な検討によって梅棹スケッチ原画として追加すべきものはあるだろう。これらについては，箱におさめられた草稿類全体の検討として今後の作業課題としてのこす。

また，梅棹がみずからほぼ清書していたものはさきに言及したもののほかにも，図 68（種雄ヒツジの貞操帯）と図 70（ヒツジの耳印）などがある。図版点数に変更は

ないが，すでに清書に近い状態であり，むしろフィールド・ノートに原画に相当する記載があるかもしれない。フィールド・ノート約 50 冊との照合は，重要な課題として今後の整理作業に期す。

3　梅棹スケッチ資料の特徴

梅棹スケッチ資料の特徴として，2 点を指摘することができる。ひとつは細部にわたる観察が徹底している点と，もうひとつはそれらの名称に関する記述をともなっている点である。

梅棹自身は「当時も，もちろんカメラもあり，わたしももっていたが，おそろしい物資不足の時代で，フィルムがほとんど手にはいらなかった。それに，器物の細部については，写真よりもむしろ，スケッチのほうが正確でよくわかる，ということもあった。さらに，そのものおよび各部分の名称を，その場で聞きとり，スケッチに記入できるという利点もあった」とのべている（梅棹 1990b: 562）。今日であれば一般に物質文化ないし物質と総称してしまうであろうところを，「器物」ということばをもちいて，対象を限定していることが注目される。そして，そのような「器物」の細部にわたる観察とその名称の記入とが，相互に密接に関連しており，民族誌としてのスケッチの特徴をつくりだしている。

そもそも梅棹は，「停年で退官したあとは，絵をかいてくらそうと永年おもいつづけてきた」（梅棹 2011: 108）というほど，絵をえがくことをこのんだ。失明によってその夢は放棄せざるをえなかったが，その画才のほどはのこされたスケッチ資料からうかがわれる。内モンゴル調査におもむく以前，1940 年のスケッチ・ブックには，〈絵は冷たかるべきこと。且，恐れを知らぬこと。「真実」という仮面をかぶっている「虚偽」を摘発すること。ささやかな真実は虚偽に近い〉という 4 月 15 日付けのメモがある（小長谷 2011a: 30）（本稿図 3 参照）。情緒を排除して冷徹な観察の道具として絵画を利用しようとしていたことが了解されよう。

この非情緒的という点は，和崎のスケッチとの対比点といってもよいように思われる。ここで，そもそも梅棹アーカイブズに和崎のスケッチがのこされている事実について考察しておこう。

梅棹アーカイブズのモンゴル調査資料のなかには，他人の調査資料もふくまれている。フィールド・ノートでは，加藤泰安のものであることが明記されたノート 3 冊，今西錦司のものと思われるノート 11 冊がみとめられる。けれども，和崎のものと確

認されるノートはみあたらず，代わって，和崎のものとみられるスケッチ資料がかなり確認される。和崎によるスケッチをゆずりうけていた，とみてよいのではないだろうか。

和崎は，所員として遠征に参加したメンバーのひとりであった。和崎は，自分と梅棹の両夫人を連れてくることになっていたが，和崎夫人は妊娠が確認されたため日本にとどまり，結果として梅棹夫人だけと同行して 7 月に渡航した。梅棹と同年齢である。戦後，梅棹はエスペラント語に傾倒するが，「エスペラント学習のきっかけをあたえてくれたのは，友人の和崎洋一であった」と述べているとおり（梅棹 2002: 92），親しい友人だったのである。

また，和崎の専攻は地球物理学であり，梅棹の専攻は動物生態学であり，いずれにとっても内モンゴルでの調査が理系から文系に転身する契機となった。両者にとって現地の人びとの生活に関するスケッチは，文化人類学的関心がもとよりそなわっていたことを証明している。本格的なフィールド・ワークの体験を共有したにとどまらず，人生における位置づけまでも共有していた，といえるかもしれない。

そもそも和崎は 1945 年 1 月 1 日に松山飛行隊への入隊が決まっており，同年 9 月から始まった現地調査の途中で帰国しなければならなかった（本田 1992: 178）。

和崎が内モンゴルに関してまったく論文を執筆しなかったことからみても，和崎のスケッチ資料は，その利用が梅棹に託されていた，と判断してよいように思われる。

さきに資料概要のところで確認したように，「図譜」作成の際に和崎のスケッチを 3 枚もちいていた。すでに 1950 年代に刊行された論文で和崎のスケッチ 2 点が注釈なしに借用されている。また，梅棹製図のなかにも和崎のスケッチにもとづいているものが見受けられる。そこで，表 1 にはそれらについて「借用」と明記しておいた。西暦は刊行されたものについてはその刊行年である。

さらに付言すれば，「図譜」の図 12（衣装の袖口）と図 106（狩猟用の罠）は，スケッチ原画に，和崎のスケッチを参考にしてえがいた旨が明記されている（本稿図 4 参照）。図 12 における人のえがきかたが，他の絵にくらべて見劣りする理由は，実物をみてえがいたのではなく，人の絵をみてえがいたからであったことがわかる。表 1 では「模写」と記しておいた。

和崎からどのようなスケッチを借用しているかという観点から，梅棹スケッチの特徴を検出することもできるのではないだろうか。

和崎から 1950 年代に借用したのは，乳製品をいれた壷がずらりとならんでいる室内の風景（「乳をめぐるモンゴルの生態 III」の図 3）と，モンゴル人みずからが刈り

とった干草を住居周辺に置いてある風景（「草刈るモンゴル」の図 8）である。また，著作集の編集時すなわち 1990 年に借用したのは，宿営地全体の風景（「図譜」の図 1）と，囲炉裏のまわりの 4 本の柱（「図譜」の図 7）と，ラマ廟の塀の外からの風景（「図譜の図 95）である。また重複して借用していたのは家畜囲いの風景（「図譜」の図 55 の 5 番め）である。和崎から借用しているのは，このように，おおむね風景である，といえよう。

和崎はほかに馬具や喫煙道具などを詳細にえがいているが，これらについては梅棹自身もえがいているから，借用する必要がなかった。また，「有蹄類動物之生態学的研究　第五冊」は，施設利用に関する論考部分であり，その資料として用意されている和崎スケッチもまたおおむね風景ではある。

このような借用関係から，和崎とくらべて梅棹のスケッチが，物質文化とりわけ「器物」そのものに焦点をあてていたことがふたたび了解されよう。モンゴルの物質文化について研究している堀田あゆみの点検によれば，フィールド・ノート 48 番の 3 月 4 日の日付のもとに「民俗学的資料」という項目があり，「遊牧社会の研究，牧畜史の研究，畜群の研究にとって，民俗学的資料も大いに役立つにちがいない」とのべ，具体的な方法として「何よりも Sketch が有力な方法となる」とのべている。また，3 月 15 日にはさらに，今和次郎の考現学 Modernology を参照する旨がしるされている。

梅棹自身によって番号つきで整理されているフィールド・ノートのうち，47 番 48 番という最終番号の 2 冊は，その日付から，渡航以前に日本でしるされていたものであることがわかっている。そこには，事前に調べておくべき項目や，現地で考察したい項目などが列挙されている。

その 48 番のフィールド・ノートの「民俗学的資料」という項目で，スケッチは「たとえ理論的に重要な結論が見出されなくても，それはそれとして大いに興味ある成果をあげることができよう」とあらかじめ位置づけられていた。「器物」を丹念に観察し，詳細にえがいて，その名称や機能を解説した梅棹スケッチは，民族誌における濃密な記述の一種である，と評価することができよう。

4　スケッチ資料におけるモンゴル語

スケッチには，モノおよびその部分の名称として，モンゴル語がしるされている。モンゴル語は，モンゴル縦文字（ウイグル文字系）による表記と，アルファベット表

記とが併用されている。使用法の解説がしるされているなかに，カタカナで登場する場合もまれにある。さらに，地名や人名についてはカタカナで表記されていることがおおい。

これらのモンゴル語の表記について，当該地域に関して地理感覚をもつ言語学者であり，共同研究「梅棹忠夫モンゴル調査資料の学術的利用」のメンバーである呉人恵によれば，和崎のスケッチでのモンゴル語はもっぱらアルファベット表記にとどまっており，一方，梅棹のスケッチにみられるモンゴル縦文字表記は，モンゴル人によるものではないか，という。1944 年から 45 年にかけての遠征には，サインエルブとバトーという通訳が同行した（梅棹 1990b: 627）。梅棹のフィールド・ノートには，かれらからの聞きとりもかなりしるされている。かれら 2 人が通訳としてのみならず，重要な情報源であったことはあきらかであり，モンゴル縦文字をかれらが書き込んだ可能性は高い。

モンゴル語表記をめぐる詳細な検討は，言語学者にゆだねたい。本稿では，これまでの作業結果を紹介することによって，検討材料の提供として寄与したい。

モンゴル語には 4 つの円唇母音 ouöü があるが，スケッチにしるされていたモンゴル語では o と u の区別はなく，また同様に ö と ü の区別もない。これはモンゴル縦文字表記の特徴でもある。つまり，つづり方の特徴と整合している。そこで，著作集の編集にあたった筆者は，梅棹の記載方法の特徴をうけて「図譜」では，4 つの円唇母音を 2 種類 ou と öü にわけ，それぞれ o と u に対応させて表記しておいた。

一方，モンゴル縦文字表記は，たとえば山という意味のオール（uul）をアゴラ（aGula）とつづるなど，長母音の場合など発音とつづりがいちじるしく異なる場合がある。日本語にたとえていうならば，いわば旧かなづかいになっていて，「ちょうちょう」を「てふてふ」とつづるようなものなのである。この点，スケッチでは，今日の正書法にはもとづいていないという点が特徴的である。比較的自由に，発音どおり記されている事例もあれば，旧かなづかいのように記されている事例もある。これに対してアルファベット表記では，長母音に聞こえるときは「¯」の記号によって明記されていた。そこで，「図譜」でも「¯」の記号を付して明記しておいた。

また，スケッチにはアルファベット表記で「ə」の記号が多用されている。これは，二重母音アイが現地の方言としてエーと聞こえることや，第 2 音節以下で母音が弱くなっていることに注目している表記方法である。そこで，「図譜」では「˘」の記号をくわえて明記しておいた。

今回の作業では，梅棹スケッチにしるされたモンゴル語（地名，人名をのぞく）を

すべて抽出し，中国内モンゴルで一般にもちいられている『蒙漢辞典』（内蒙古大学蒙古語文研究室 1976）などの標準的な辞書の語彙と対比して確認した。モンゴル語の表記は約 300 あり，重複をのぞくと 240 語にのぼった。辞書との対比作業によって以下の点を指摘することができる。

第 1 に，モンゴル縦文字表記とアルファベット表記とのあいだに相違のある事例がみとめられる。たとえば，l と r の入れ替わりなど音のちがいがみられる場合と，そもそも異なる単語が書かれている場合がある。前者の例として，たとえば図 41 の原画に，牛糞を意味するアルガルがローマ字では argar（誤）とつづられ，モンゴル縦文字では argal（正）とつづられている。このような音の表記の不一致は，梅棹が自分の耳で聞き取り，その後，おそらくモンゴル人がモンゴル文字表記を加筆したであろうことを示唆している [3)]。後者の例として，たとえば図 16 の原画に，タバコ入れについて，袋を意味するモンゴル語として，ローマ字では xōtai とつづられ，モンゴル縦文字では küdei とつづられている。一見似ているが，袋を意味するオートの方言と，漢語「口袋」に由来するフーディとに対応している [4)]。前者と後者を同時にしめす例として，図 80 の原画に，鞍の後ろのもりあがった部分（鞍橋）が，ローマ字では xoitu bulig とつづられ，モンゴル縦文字では aru bürüg とある。鞍橋は bürüg といい，うしろを意味するモンゴル語としてはホイトでもアルでもよい。

以上のように，モンゴル語に関する 2 種類の表記のずれは，梅棹の聞き取りによるローマ字表記とは別に，モンゴル縦文字が後から加筆されたことを示唆しているであろう。

第 2 に，240 語のうち，26 語について中国語からの借用であることが確認される。1 割以上となっている。この比率は高いとみてよいのではないだろうか。調査地域が内モンゴルのなかでも南部であること，漢族が製造するモノや売買されるモノが多いことを反映していると思われる。もとの中国語とともに以下に列挙する。

羊毛をときほぐすための道具バンザ（扳子），グン（弓），グンシャン（弓線）おなじくフェルトをつくる道具パン（板），パークンズ（扒棍子），標識パイサ（牌子），水筒ピンコー（瓶口），鉄砲ポー（炮），物置プン（棚），雪かき道具ガーパー（刮扒）ないしガーホー，袋フーディ（口袋），フーズ（口子），杵ラントー（棚頭），たんすシューゲイ（橱柜），水樽タエロー（抬樽），ほうきトージョー（笤箒），箱ドゥー（斗），はさみツェンジ（鋏子），大工道具の鑿（のみ）チュチェ（鑿子），包丁チェートー（菜刀），つるはしジェートー（鎲頭），茶漉しジョーラー（遮欄），型ヤンズ（様子），壷ワール（瓦），硬いガン（鋼），桃トール（桃）

これらの単語は, 現在, 一般にモンゴル語としてもちいられており, もとの漢字をモンゴル人にたずねても不分明であるほど漢字が意識されることもなく利用されている。

第 3 に，調査地域内のチャハルとスニトの方言差について記載されているという特徴がある。たとえば，さきほど言及したタバコ入れについて，ホータイはスニト地方，タールチグはチャハル地方という区別が併記されている（本稿図 5 参照）。原画スケッチ 132 枚のうち 10 枚に方言が対比されてしるされている。梅棹のモンゴル研究において地域差は重要な視点であった。たとえば，論文「草刈るモンゴル」は，草刈り道具の地域差に注目し，その差が植生の差と整合していることから，草刈りを伝統的な技術の一環として位置づけるものであった。スケッチでは，草刈り道具にとどまらず，馬具などの地域差が注目されている。とともに,「器物」がたとえ同一であっても，その名称のちがいにも注目されていたことがわかる。

2012 年 5 月の現地研究者との共同作業を経てなお，不明としてのこしたのは，ホンコ（鍋の一部？）とホングリ（皮袋）の 2 点である。また，確認にとまどったものとしては，ホールト（大工道具の一種），ゴシグ（革ひも），ホンゴー（袋），トーシン（鞭）の 4 点がある。

これら不分明だった 6 点のうち，ホンコは後に述べるように記載の誤りではないかと思われる。この単語と，大工道具をのぞくと，その他はいずれも皮革製品であり，実態とともに名称が消えていると思われるものである。なお，本稿では革の字はなめしたものに，皮の字はなめしてないものに使いわけている。

ゴシグは,「図譜」の図 2 の原画であるスケッチには，オヤーとよばれる駒つなぎの革ひもで，駒つなぎ専用の名称であることがしるされている。しかし，現地では現在，一般に駒つなぎもその綱もオヤーとよばれており，革ひもだけを別にさす単語を聞きだすことができなかった。たとえば，図 85 にあるような鞭に用いられる革ひもは，平たく編まれるのに対して，駒つなぎの革ひもは縄のようになってある。その点に注目した単語であると思われる。後述するように，材料としての革ひもが不足し，みずから製作しなくなったこと，ならびに革ひも製ではなくても代用が可能なことから，名称が物質文化の変容とともに消滅しつつあるものと思われる。

ホングリは,「図譜」の図 42 の牛皮でつくられた牛糞入れをいうとのことである [5)]。これもまた先と同様に皮革が入手しにくくなり，かつ代用が可能であることから，ホングリなるものはもはやまったく見かけることがなく，と同時に名称もわすれられたようである。

トーシンは,「図譜」の図 85 の鞭の原画であるスケッチにおいて，ウマ用の木製の

鞭に対して，ウシを追うときは，革ひもをつないで延長する使い方があるとともに，そのときはトーシンとよぶ，と記されている。ただし，モンゴル縦文字のつづりはトシグ toshig と読める。トーシンという単語は，長い革ひもの鞭の意味をもつ。2012年現在，ウマの鞭もあれば，ウシ追いの鞭もそれぞれ存在する。しかし，スケッチに記載されているような併用した利用方法をみいだすことはできなかった。放牧の形態が変容するとともに，素材が不足してもはや普遍的なつかい方ではなくなりつつあるのかもしれない。

不分明な 6 点のうち，ホンコというものが 2 点ある。ひとつのホンコは，「乳をめぐるモンゴルの生態 III」の図 11 にある蒸留装置の原画に記載されている。鍋の黒いかげの部分がさししめされている。鍋としては別の単語が記載されているので，具体的に何をさしているのか不分明である。ただし，モンゴル縦文字のつづりは keügeü と読めることから，ホー köö（煤の意，現代の正書法では kö とつづる）を意図したつづりであったかもしれない。当時，正書法は確定していなかったので，発音の雰囲気は自由に表現されていた。煤をさしているとすれば，先に文字でつづられた可能性がある。モンゴル縦文字のつづりをみながら，発音をあとからアルファベットで表記するということも，まれにあったのかもしれない。

もうひとつのホンコは，「乳をめぐるモンゴルの生態 III」の図 17 にある布袋のスニト地方の名称である。チャハルではタールチクというと原画に説明されており，こちらの単語は普遍的な名称として確認された。一方，方言としてホンゴーという名称もあることがわかった。

以上のように，ホングリとホンコの 2 点はいまなお不明であるが，それ以外については問題を解決することができた。

今後は，フィールド・ノートの記載とも対比させることによって，不明な点についてより一層あきらかになるにちがいない。

5　スケッチ資料にえがかれた物質文化の現在

梅棹が着目して詳細を記録した「器物」は当時の物質文化の一側面であるが，かならずしも網羅的ではなく，ましてや悉皆調査であるとはいえない。したがって，それらの変容について，どの程度がのこっているかという量的な状況を数値でしめしてもあまり意味がないだろう。本稿では，いくつかの事例から，どのような変容がどのように進行しているかについて具体的な知見を提供しよう。

「図譜」では大項目として「生活」「食事」「生業」とわけられた。衣食住のうちの食とりわけ乳製品加工についての材料が豊富であったため，生活のうちの食事が分割されて，住，衣，食という順で記述されたのだった。いまこれにしたがって変容についての概要をのべると，住についてはほぼ固定式家屋に住むようになって移動しなくなっているので，その物質文化の変容は大きい。ゲルは，もっぱら博物館やレストランあるいは写真館など家屋の中にみうけられ，あるいはツーリストキャンプになっている。これに対して，衣は，民族衣装として商品化することで維持されている。食については，乳製品が量的にそのウェイトをへらしているものの，乳製品加工そのものはつづけられており，したがって，その道具類は現役で使われている。牧畜に関する道具類のうち，家畜に対して対個体的に利用するものはかつての道具類がおおむね維持されているように思われる。しかし，自動車や草刈り機などの家畜に対する道具でない部分は，おおはばに機械化がすすんでおり，かつての道具はとってかわられている。

以下，梅棹が 1945 年ごろにえがいた道具類が現在も使われている場合と，そうでない場合に分けて整理しておく。

5.1　使われつづけている場合

基本的に，1940 年当時の物質文化が現在も一般に使われている場合とそうでない場合とに大別することはできる。ただし，その理由や現象は一義的ではなく，多義的である。

5.1.1　素材の変化とそれにともなう使用法の変化

馬具類は，こんにちでも使用されている。しかしながら，徐々に生活用品から文化財になりつつあるといえよう。2012 年 5 月通遼市にあるホルチン博物館では，内モンゴル各地の鞍の展示がおこなわれ，製作者のプロフィールが無形文化財の保持者として展示されていた（写真 1）。モンゴル国では現在でも木製部分を購入し，その他の部分は自身で製作することが多いのに対して，内モンゴルでは商品化がすすんでいる（写真 2）。

一見，伝統的であると思われた馬具ではあるが，次のような変容がみられた。

西スニト旗の中心地から北へ 40 キロほどのところにあるバヤンオール・ソム（旗の下の行政単位）のバヤンタラ・ガチャ（もっとも下位の行政単位）で，比較的裕福な牧畜民宅をたずねた。この家の主人は，銀製の装飾のついた鞍と頭絡類を自宅にかざっていた（写真 3）。一方，作業用のウマが駒つなぎにつながれており，これらの



写真 1　通遼市ホルチン博物館（2012 年 5 月 4 日堀田あゆみ撮影）



写真 2　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）



写真 3　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）



写真 4　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）

ウマにも鞍と頭絡がつけられていた。しかし，その頭絡も足かせも革ひも製ではなく，布製ロープもあった（写真 4）。同行した一般のモンゴル人は，どうやらそのことを恥ずかしく感じたようで，あとから革ひも製が納屋から発見されたとき，これこそ本物であるから，こちらを撮影するようにとつよくすすめた。

さらに，帰国後，これらの写真を点検すると，実は，頭絡の使用法が簡素に変わっていた。ふつうは，ノクトとよばれるおもがいと，ハザールとよばれるハミをつける（写真 5）。ウマの頭部には 2 種類の革ひもがつけられるものである。ところが，1 頭にはノクトだけであり（写真 6），1 頭にはハザールだけであった（写真 7）。前者はハザールをはずしている休ませている状態として一般的だが，後者はノクトがそもそも着けられていないと思われる。

ウマに乗ることが減ったばかりでなく，革ひもの供給が減っていることと関係しているように思われる。ウシを生体のまま売却すると，毛皮が手元にのこらない。そのため，みずから革なめしをおこなわず，また革ひもを作ることもなくなりつつある。また現在，革ひも製品および原材料の革ひもがあまり商品化されていない。都市化にともない家畜の生体売却がすすむことによって，皮革加工技術が少なくとも各戸では衰退している。

一見，使われつづけているようにみえても，素材の変化と，使用法の簡素化が進行している。ただし，名称についてはほとんど変わらずに使われていた。



写真 5　西ウジムチン旗（2012 年 5 月 6 日　筆者撮影）



写真 6　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）



写真 7　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）

5.1.2　素材の変化にもかかわらず維持される地域差

牛糞をあつめるときにもちいるかごについては，素材の変化だけがはっきりとみとめられた。従来ボルガスとよばれる柳条をあみあげてつくられてきた。しかし，現在では，鉄製を購入しているところもある（写真 8）。自然素材の減少にともなって市場で商品として供給されている。もともと，牛糞のかごは地域によってその形状が異なっていた。今日，商品になってもいまだに形状のちがいが維持されている。

牛糞は，生活のための現金支出をひきさげる貴重な燃料である。集められた山をみるかぎり，現在でも積極的に牛糞あつめはおこなわれている（写真 9）。道具と名称は，地域差の形状もふくめて変わらずに維持されるだろう。それでも，素材の変化はまぬかれないようである。

5.1.3　商品化による維持

台所用品や民族衣装は商品化されることによって維持されている。台所用品については，素材が変わっているが，名称に変化はあまりみられない。民族衣装については，商品化されることによってデザインが変わるばかりでなく，一般の人びとがつくらなくなることによって部分の名称などが消えるであろうと思われる。

商品として提供されることによって維持されるモノは，1940 年代にもあった。たとえば，鉄製のハサミや雪かき器などである。そのような鉄製の道具類は，当時から鍛冶屋が提供しており，現在は店頭で商品として供給されていて，形も名称も変化がみられない。

5.2　使われなくなった場合

使われなくなったものには，いくつかのパターンが見受けられる。

5.2.1　博物館化とおみやげ化

まず，博物館入りしているものの典型として五徳があげられる。1940 年代には現役でもちいられていたが，当時でも鉄製のストーブと泥製のかまどが浸透していた。現在では，囲炉裏に五徳をおいて煮炊きすることはない。直火になるため，屋内がすすで汚れてしまうばかりでなく，危険でもある。実用面でかえりみられない。しかし，もともと五徳は移動の際に最後に運ぶなどの儀礼的所作を必要とする，一種の象徴財であっただけに，博物館での必須アイテムとなっている。

接客用にゲルを設置している裕福な家庭では，装飾品として置いてある場合もあっ



写真 8　ジャロート旗（2012 年 5 月 5 日　堀田あゆみ撮影）



写真 9　ジャロート旗（2012 年 5 月 5 日　堀田あゆみ撮影）

た（写真 10）。また，結婚の際に伝統的な雰囲気がしつらえられている屋内で記念写真をとるという写真館にも装飾品として置いてあった。また，五徳のミニチュアがお土産やさんにならんでいた（写真 11）。ミニチュアがおみやげになることは，とりもなおさず，実態的な生活世界から抜け出てしまったことをしめす，ひとつの指標になるだろう。

その点で，乳製品加工における発酵乳用の桶も危機的状況にあるといえるかもしれない。現時点で，木製の桶は，家畜を飼い，乳をしぼっている家ではたいていまだ現役で利用されていた（写真 12）。しかし，他の素材でも可能であるため，モンゴル国ではむしろポリタンクが一般的である。移動に適しているからであろう。換言すれば，もはや移動しなくなっている内モンゴルだからこそ，重い木製の桶がいまだに使

われつづけている，という状況なのである。生活様式の変化にともなう，物質文化の保存という逆転現象が生じている点は興味深い。ただし，ミニチュアがおみやげになっている現状は，早晩，これも消えることの予兆であるように思われる（写真 13）。

2010 年に開館したスニト博物館には，タムガとよばれる焼印の大量のコレクションが展示されていた（写真 14）。これは現在でも牧畜民のあいだで一般に使われているものである。にもかかわらず，これほど大量に博物館に入っていることから，大幅にラクダなど大型家畜の利用が減っていることをしめしている。

茶葉を砕くために用いられていた臼と杵は，現在，茶葉がすでに砕いた状態で販売されているため，生活上の必要がなくなり，博物館に集められている（写真 15）。おもしろいことに，杵はなく，臼ばかりが集められている。杵は，他の目的にも多様につかえるために家庭にのこったのかもしれないが，一般家庭で杵をみかけることもな



写真 10　東ウジムチン旗（2012 年 5 月 6 日　筆者撮影）



写真 11　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）



写真 12　東ウジムチン旗（2012 年 5 月 6 日　堀田あゆみ撮影）



写真 13　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　堀田あゆみ撮影）



写真 14　西スニト博物館（2012 年 5 月 1 日　筆者撮影）

かったので，杵は，臼よりも耐久性に欠け，さきになくなってしまったのかもしれない。

5.2.2　用途のさまがわり，あるいはそれ自身の博物館化

モンゴル語でゲルとよばれ，中国語で包（パオ）とよばれるフェルト製の移動式住居は，博物館に入っているとともに，一般の人びとの生活ではほとんど使われなくなっている。わずかに使われている事例はあるが，その様子がまったく従来と変化している（楊 1996）。もはやそこで日常生活をいとなむのではなく，きれいにかざって



写真 15　西スニト「タマチ」私立博物館（2012 年 5 月 1 日　堀田あゆみ撮影）

接客用に利用するか（写真 10 参照），当面の不用品をつっこんで納屋として利用するかという 2 つのタイプが見受けられた。観光施設は前者の典型例としてふくめてよいだろう。観光施設では鉄製の骨組みが用いられていることもある。家庭で鉄製の骨組みを買い求めた結果，その始末にこまり，まったく倉庫と化している事例も見受けられた（写真 16）。そのなかには，使われなくなった道具類が満載されていた。

個人の生活態度に応じてゲルの使い方はさまざまな可能性をもっているが，接客用であれ倉庫であれ，簡便な移動を是とする機能がうしなわれているという点で，用途がすっかりさまがわりしているとみておきたい。また，見せる機能と貯える機能という 2 つの機能はまさに博物館の機能に相当する。生活のなかでの博物館化が進行している。

牛車もまたゲルと同様に博物館で伝統的な生活を見せるには必須のアイテムである。そして，一般家庭にある場合は，もはや移動の機能をうしない，倉庫としてもちいられている（写真 17）。牛車には，ハサグとジョローチンという 2 種があった。前者は，車軸と車輪が固定していない古いタイプのものである。この名称はよく知られているが，今回の調査によれば，そのメカニズムが理解されているわけではなく，ましてや，その部品名称などはあまり知られていなかった。たとえば，ウシのくびきについて，上下 2 本の木があり，それぞれに名前が異なることを言い分けられる人にはなかなか遭遇できなかった。内モンゴルの東部で石炭開発のために飛び地ができて，その結果，現在も移動をつづけているジャロート旗でのみ，確認することができた。



写真 16　東ウジムチン旗（2012 年 5 月 6 日　堀田あゆみ撮影）



写真 17　東ウジムチン旗（2012 年 5 月 6 日　筆者撮影）

5.2.3　機械化による置換

梅棹は論文「草刈るモンゴル」で，2 種類の鎌が草原の植生に対応して分布していることから，草を刈る生業活動が，生態学的な整合性をもち伝統として確立した現象であるとみている。ところが，1980 年代に当該地域には草刈機が普及した。モンゴル国では草刈の機械化は，国営農場や牧畜共同組合など組織的に実施された。内モンゴルでは生産のための集団組織がいち早く解体し，より多くの家庭に草刈機が普及している（写真 18）。草刈機が普及すると，草刈鎌はもちいられない。ハドールとよばれる小さな鎌は，普遍的に多様にもちいられるが（写真 19），サンドーという柄が 2 メートルもあるものは，草刈り以外にもちいられる機会がない。生産様式における機械化によって，置換がおきた事例である。



写真 18　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）



写真 19　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）

また，鞍のうち，ウマ用にくらべてラクダ用は，うちすてられやすい。ウマとラクダは季節的に乗りわけられてきた。ラクダは冬から春にかけて厳寒期の乗りものであるため，ウマよりも，容易に車に置換されやすい。ウマの鞍はかざられてのこり，ラクダの鞍は倉庫にうちすてられる（写真 20）。ゴミを回収するシステムが確立していないため，かろうじて消去されずに手元にのこされているという状態である。

フェルト製造についても置換がおこっている。梅棹のフィールド・ノート 11 番の 12 月 13 日には，モンゴル人のフェルトのつくり方が記載されている。ただし，これは聞きとりによるものにとどまる。梅棹が自身で実見したのは，ラマ寺院の庭における漢人たちのフェルト製作である。関連する 5 点のスケッチにえがかれた作業の実態や名称は確認することができなかった。かつては専門家集団が巡回して請け負っていた作業が，現在では，工場内でより機械化して実施されていると思われる。工場におもむけば古い製造方法をも確認できたかもしれない。



写真 20　西スニト旗（2012 年 5 月 2 日　筆者撮影）

6　おわりに

梅棹忠夫は，みずからの研究者人生の起点を山と探検においている。たとえば，著作集第 1 巻『探検の時代』のまえがきで「研究のすすめかた，組織のくみかたなどについての戦略のたてかたを，わたしは，探検という実践的行為をとおしてまなんだのである」とのべている（梅棹 1990a: iv）。

梅棹の最初の探検は，1920 年の白頭山遠征であった。このとき頂上付近の火口部にある天池について，「悪魔的な美しさ」とのべているのは，この天池の発見者である F. ヤングハズバンドの旅行記にある表現にもとづいている。白頭山から西に向かってひろがる中央アジアへ，梅棹忠夫もまたヤングハズバンドのように探検を熱望した。その願いは 1942 年に北部大興安嶺でやや実現されるけれども，それ以前の 41 年には探検の行き先をポナペ島に転じなければならなかった。興味深いことに，「ポナペ島」と記された関係書類のファイルのなかに，タイピングされたロイ・チャップマン・アンドリューズの旅行記“*Across Mongolian Plain*”の抜粋がある。太平洋を南下する船パラオ丸のなかで読んでいたのであろうか。南へ向かいながらも，梅棹の思いはやはり北にあり，中央アジアへの思いは途切れることがなかったのではないかと想像される。

内陸アジアからの探検の最終目的地はヒマラヤであった。そこに向かって西へと移動していくという大志の途上にモンゴル草原は位置づけられていた。モンゴルからは，寧夏，青海，西蔵へ行くつもりだったが，「中央アジアへの夢は，モンゴルまでで挫折した」と後年，回想している（梅棹 1990a: 386）。夢を実現する途上で梅棹が「わが青春の情熱をかたむけつくしたように感じている」（梅棹 1990b: iv）のがモン

ゴル牧畜およびモンゴル牧畜社会の研究であった。のこされた膨大な調査資料は，まさにそうした情熱のあかしである。

そのうちのスケッチは，梅棹よりも少し前に中央アジアを探検していた S. ヘディンのスケッチがほとんど風景画であるといえるのにくらべると（たとえば，Montell 1964），むしろ図解説明ともよびたくなるような描写である点が特徴的である。一方，モンゴルの言語学的資料として知られている J. シューベルトの語彙集とくらべると（Schubert 1971），その図解説明が完全に図であるのに対して，梅棹のスケッチは絵画的である。梅棹のそれはちょうど両者のあいだにあって，写真的であるように思われる。つまり，風景画と図解とのあいだに位置していて，語彙とともに図と文章でしっかりと説明されているという点で，民族誌に相当しているのである。『草原物質文化研究』（扎格尔 2007）が物質文化に対する近年の関心の所在をしめしながらも概説にとどまるのに対して，1940 年代のスケッチは，当時の物質文化を事実として記録しているという点で歴史的な価値をもつだろう。

とはいえ，すでにほとんどが著作集の編集時に清書されて刊行されたので，このたび本稿では，編集時に発生した誤りを正しておいた。また，オリジナルな資料の段階で発生していると思われる問題点も明らかにした。さらに，現代の当該地域での変容について若干の考察をくわえた。

現在，スケッチ原画集を民族誌の一種として刊行する予定で資料を整理しており，本稿では，図や文字など視覚的な情報については一部の例を示すにとどめている点について，読者のご海容をたまわりたい。

謝　　辞

共同研究「梅棹忠夫モンゴル調査資料の学術的利用」のメンバーのうち，本稿については，本文中にも明記したように，言語学的観点から分析している呉人恵教授と，物質文化的観点から接近している堀田あゆみ（総合研究大学院大学博士課程）の指摘を活かしている。また，現地調査では，多数のかたがたにお世話になったが，モンゴル語の確定においてはとくに中央民族大学の薩仁格日勒（サランゲレル）教授と，内蒙古大学の那仁格日勒（ナランゲレル）教授と，内蒙古民族大学の秋喜教授のご教授におおくを負っている。厚く感謝する。

また，アーカイブズの整理にあたっている梅棹資料室の三原喜久子さんと明星恭子さんにもお礼申しあげる。

注

1）これらのアーカイブズ資料を利用して，国立民族学博物館において特別展「ウメサオタダオ展──知的先覚者の軌跡」（2011.3.10 ～ 2011.6.14）と日本科学未来館において企画展「ウメサオタダオ展──未来を探検する知の道具」（2011.12.21 ～ 2012.2.20）が実施された。フィールド・ワークの成果である調査資料が公開されたことの反響は大きく，入館者に知的刺激をあたえたことが看取された（小長谷 2011b）。

2）論文「乳をめぐるモンゴルの生態 III」の図 11 には，蒸留用の樽と冷却水を入れる鍋とのあいだを密閉するための，フェルトの帯がえがかれている。キャプションには「オロート」とあるが，正しくは「オロールト」である。巻くものというほどの意味である。これについては，別途，スケッチ原画がのこされていた。「図譜」ではこれを家屋の裾を巻くものとしてあやまって図 4 にもちいた。家屋の裾をフェルトで巻くこともあるが，図 11 の原画となるスケッチ（蒸留装置）と，オロールト（「図譜」の図 4）の原画となるスケッチは，同じ場所でえがかれていることから，このフェルトの巻きものは，そもそも蒸留装置用であったと判断される。両者はいずれもラクダの毛でさしこされている。その模様がちがってみえるのは，著作集の編集時の清書により発生した問題である。もとのスケッチを見るかぎり，両者のさしこ模様はおなじにみえる。

3）「図譜」では，子音の交替は基本的に修正済みである。ただし，著作集の編集時に不分明であり，今回あらためて明らかになった単語として，「図譜」の図 53 にある 2 種類のチョウナの丸いほうの名まえがある。聞き取りによれば，オーラガ ūraGa とよばれるウマとり竿の，竿の木をけずるのにもちいるので，オーラガのチョウナとよぶ，とのことであった。したがって，r であるべきところであるが，図譜では l で記載していた。スケッチ原画では，アルファベット表記は r で，梅棹が正しく聞き取っていたにもかかわらず，モンゴル縦文字表記が l と読めるためである。

4）タバコのことをモンゴル語でタムヒという。スケッチ原画には，アルファベットでタムグネイ・オート，モンゴル縦文字でフーディ，さらにチャハル方言ではタールチグと記されている。にもかかわらず，「図譜」では，ガンスネイ・オート（キセルの袋）とあやまって解説したので，ここで訂正する次第である。

5）「図譜」の図 42 の原画であるスケッチには，モンゴル縦文字ではシリン・ホンホルとつづられており，アルファベットではシルー・ホングリとつづられている。「図譜」では，シラ・ホングリと記した。しかし，牛皮製であるという記載から，家畜をとわずに「皮の」を意味するシリンとしたほうがいいだろう。

参考文献

Andrews, Roy Chapman
1921 *Across Mongolian Plain: A Naturalist's Account of China's "Great Northwest"*. New York: D. Appleton and Company.

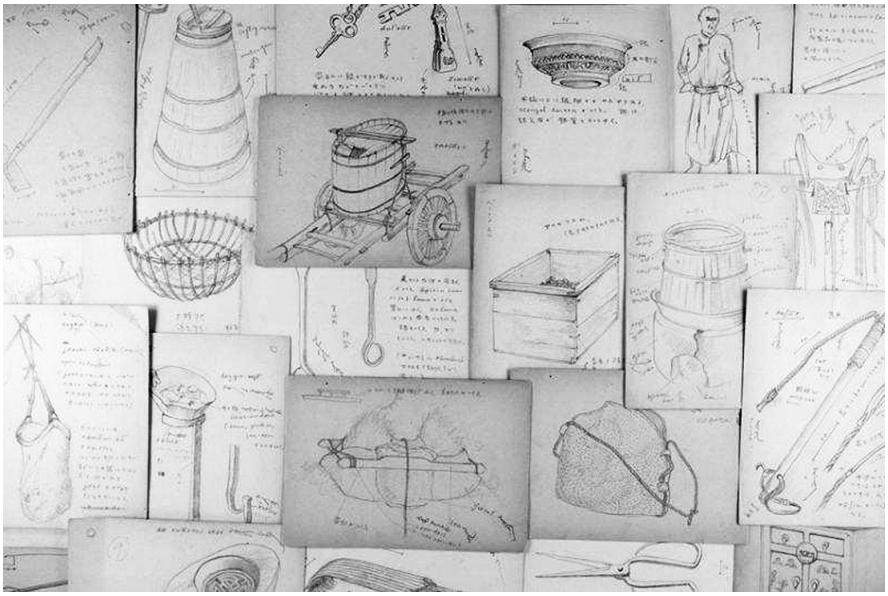
Montell, Gösta
1964 *Sven Hedin As Artist: for the century of Sven Hedin's Birth*. Stockholm: Statens Ethnigragfiska Museum.

Schubert, Johannes
1971 *Paralipomena Mongolica: Wissenschaftliche Notizen* über *Land, Leute und Lebensweise in der Mongolischen Volksrepublik*. Veröffentlichungen des Museums für Völkerkunde zu Laipzig H.19, Berlin: Akademie-verlag.

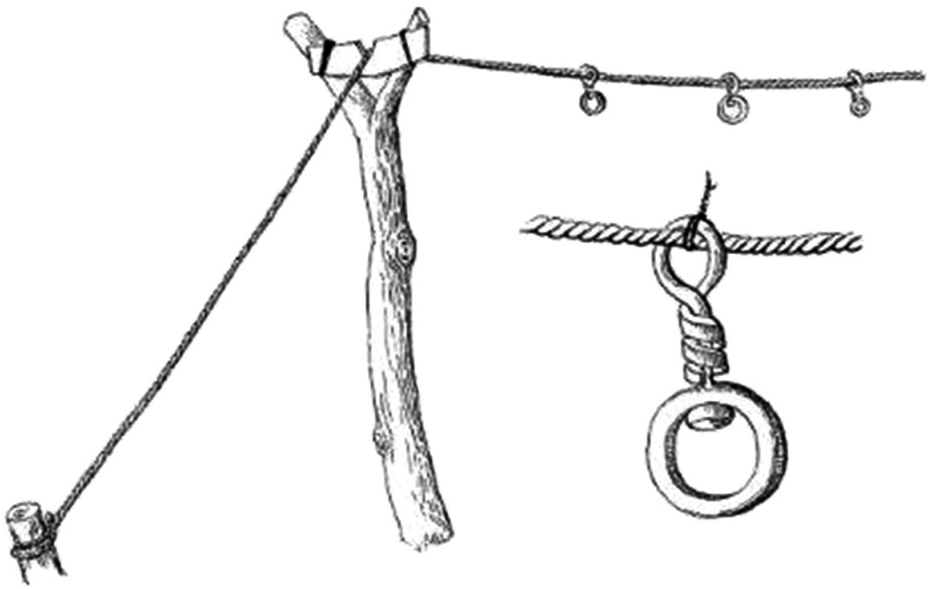
扎格尔　編
2007 『草原物質文化研究』呼和浩特：内蒙古教育出版社。

小長谷有紀
1990 「原点としてのモンゴル」梅棹忠夫著作集第 2 巻『モンゴル研究』pp. 639–657，東京：中央公論社。

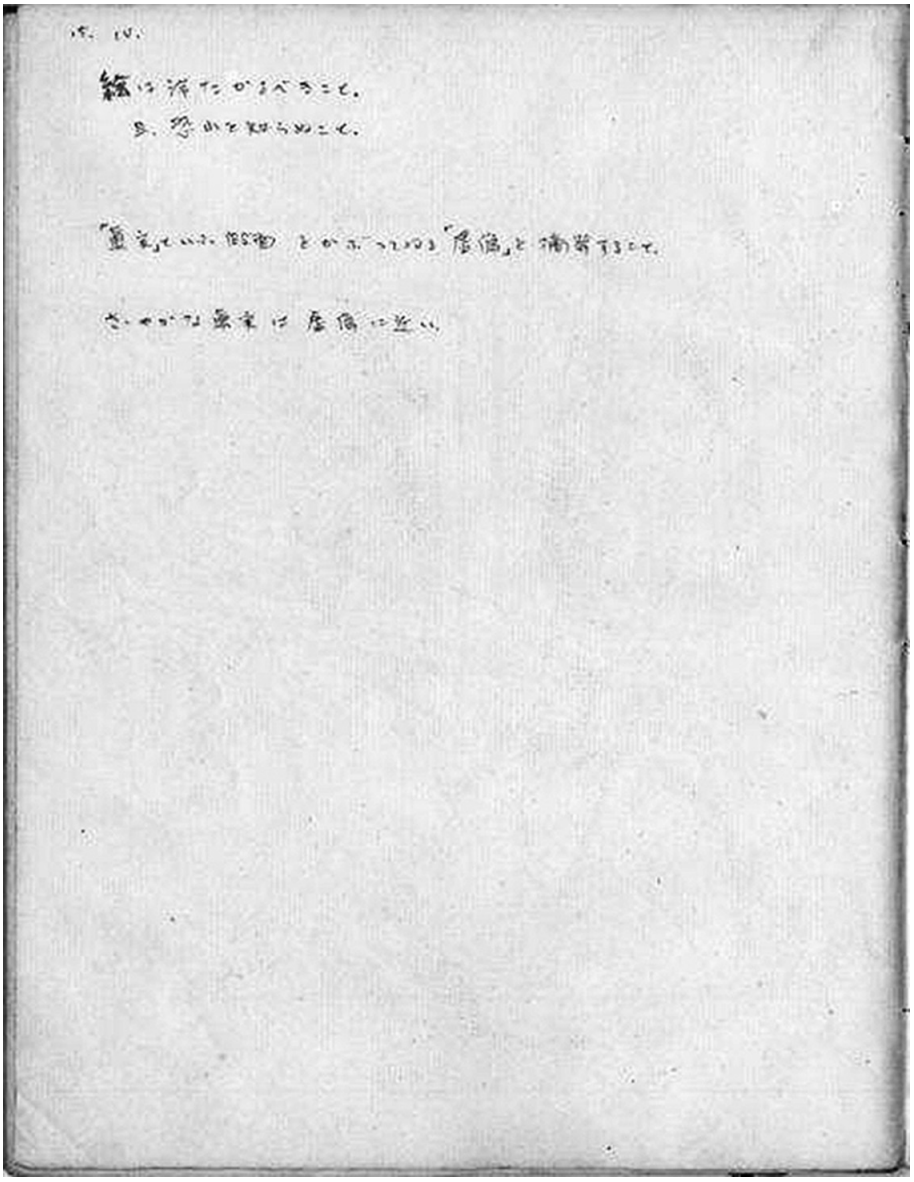
2011a「知的生産の七つ道具にみる思想」『考える人』37: 28–35。
2011b『ウメサオタダオと出あう』東京：小学館。
内蒙古大学蒙古語文研究室
1976 『蒙漢辞典』呼和浩特：内蒙古人民出版社。
梅棹忠夫
1990a 梅棹忠夫著作集第 1 巻『探検の時代』東京：中央公論社。
1990b 梅棹忠夫著作集第 2 巻『モンゴル研究』東京：中央公論社。
1991 『回想のモンゴル』（文庫版）東京：中央公論社。
1992 梅棹忠夫著作集第 11 巻『知の技術』東京：中央公論社。
1993 梅棹忠夫著作集第 22 巻『研究と経営』東京：中央公論社。
2002 『行為と妄想──わたしの履歴書』（文庫版）東京：中央公論新社。
2011 『裏がえしの自伝』（文庫版）東京：中央公論新社。
楊　海英
1996 「都市の「蒙古包（ゲル）」」『民博通信』73: 30–40。



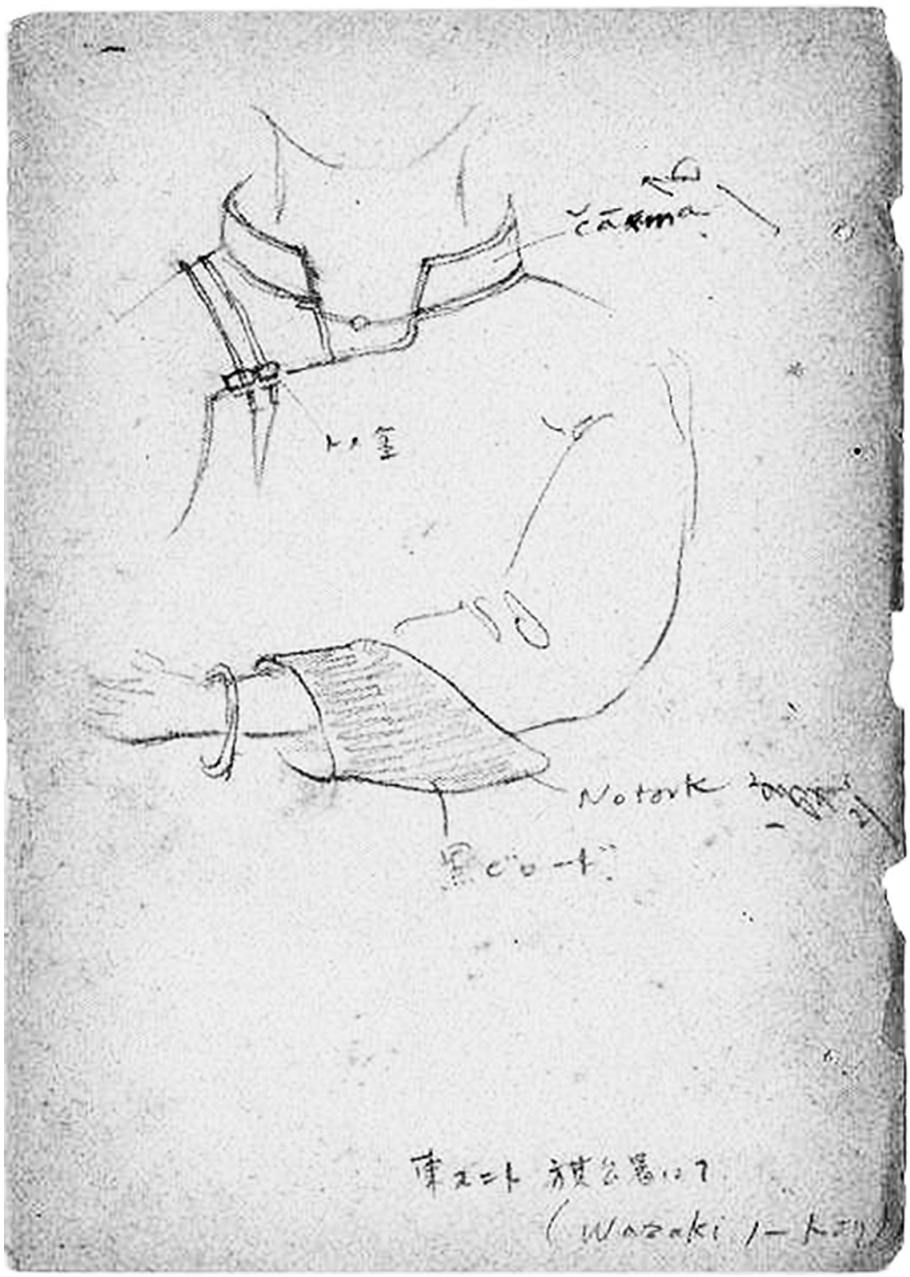
本稿図 1　梅棹スケッチ原画



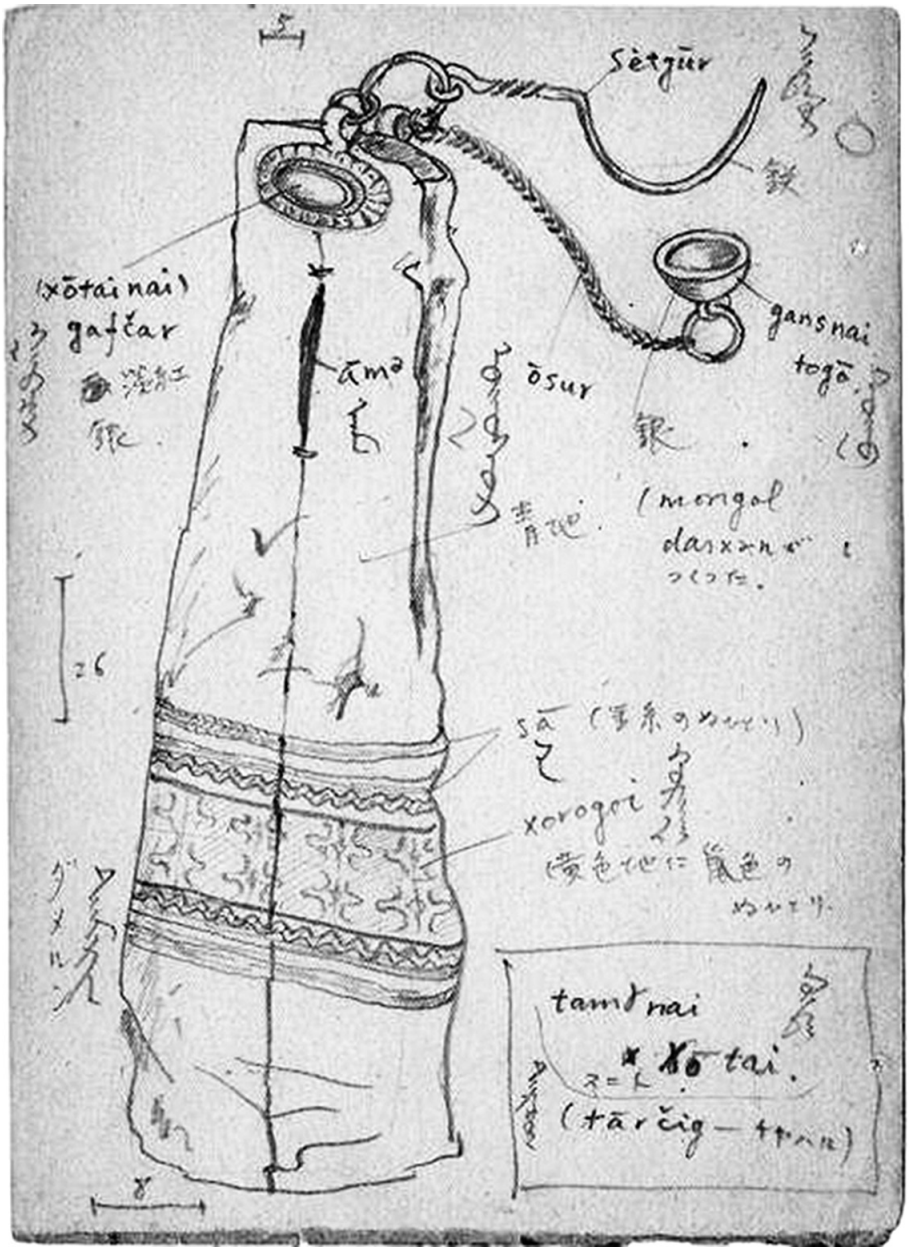
本稿図 2　梅棹製図



本稿図 3　1940 年のメモ



本稿図 4　和崎を参照しているというメモ書き



本稿図 5　方言についてのメモ書き

表 1　梅棹スケッチ原画リスト

「図譜」番号	追加番号	「図譜」タイトル	図版内容	原画なし	和崎関連	分割	統合	梅棹製図	備考
1		宿営地	宿営地		借用 1990				A4 サイズ。
2		訪問	駒つなぎ					○	
3		家屋	屋根	○					
4		家屋	裾まわり						本来，補 10 の一部であった。本文の注 2 参照。
5		室内	五徳					○	
6		室内	ストーブ						
7		室内	囲炉裏		借用 1990				原画に WAZAKI のサインあり。
8		家財道具	タンス					○	
9		家財道具	食器棚						
10		家財道具	机					○	
11		衣服	衣服	○					
12		衣服	袖口		模写 1945				
13		帽子と靴	帽子	○					
14		帽子と靴	靴						
15		帽子と靴	靴底						
16		タバコいれ	タバコいれ					○	本文の注 4 参照。
17		タバコいれ	キセル					○	
18		タバコいれ	長靴とキセル						
19		かぎタバコいれ	かぎタバコいれ					○	
20		鍵などの携帯品	鍵					○	
21		娯楽	距骨	○					これとは別に、知恵の輪の製図がある。
22		音楽	馬頭琴	○					
23		乳茶	臼				原画 2 枚	○	
			杵				同上	○	
24		乳茶	塩入れ						
25		乳茶	ソーダ入れ					○	
26		乳茶	やかん						
27		乳茶	茶こし					○	バケツであったろう。
28		乳茶	銀椀						
29		穀類	フェルト製袋					○	
30		ヒツジをたべる	ゆで肉盛り皿	○					
31		蒙古刀	刀	○					
	補 1	乳製品	耳つき壷					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 1
	補 2		壷					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 2
			室内		借用 1955				論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 3
	補 3		バターのいれもの						論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 4
	補 4		ざる					◎	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 5
	補 5		木枠					◎	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 6
	補 6		箱型					◎	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 7
	補 7		型（模様つき）					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 8
	補 8		型（模様・柄つき）					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 9
	補 9		桶					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 10
	補 10		蒸留装置					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 11
	補 11		桶					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 12
	補 12		すのこ						論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 13
	補 13		桶					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 14
	補 14		布袋					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅲ」の図 17
	補 15		搾乳用桶					○	論文「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅱ」の図 1
32		台所	小屋						

「図譜」番号	追加番号	「図譜」タイトル	図版内容	原画なし	和崎関連	分割	統合	梅棹製図	備考
33		台所	乳製品乾燥台						
34		桶	木製桶					○	図 34 と図 35 は入れ替わっていた。
35		桶	木製水筒					○	同上。
36		桶	真鍮製					○	
37		桶	陶器						
38		包丁類	包丁					○	
39		包丁類	刀					○	
40		包丁類	刀					○	
41		アルガル	木箱					○	
42		アルガル	皮袋					○	本文の注 5 参照。
43		アルガル	火ばさみ					○	
44		アルガル	灰かきだし			補 10 より		○	
45		アルガルひろい	かご					○	
46		アルガルひろい	熊手					○	
47		アルガルひろい	囲い						
48		羊糞	つるはし					○	
49		灯火	ランプ					○	
50		大工	のこぎり					○	
51		大工	手のこぎり					◎	
52		大工	斧					◎	
53		大工	鑿錐類				原画 3 枚	○	
			鑿錐類				同上	○	本文の注 3 参照。
			鑿錐類				同上		
54		雪	雪かき道具					○	
55		放牧	家畜囲い				原画 4 枚		
			家畜囲い				同上		
			家畜囲い		借用 1945		同上		清書された図の原画であったろう。
	補 16		鎌						論文「草刈るモンゴル」の図 2
	補 17		手鎌						論文「草刈るモンゴル」の図 3
	補 18		草用熊手						論文「草刈るモンゴル」の図 5
	補 19		乾草おき場		借用 1955				論文「草刈るモンゴル」の図 9
	補 20		乾草おき場						論文「草刈るモンゴル」の図 10
56		ウマとり竿	ウマとり竿					◎	
57		井戸	井戸						
58		井戸	井戸囲い					○	
59		井戸	井戸用桶					○	
60		井戸	井戸用桶					○	
61		井戸	バケツ					○	
62		井戸	氷割り					○	
63		幼畜管理	おくるみ						
64		幼畜管理	かぶせ						
65		幼畜管理	哺乳瓶					○	
66		幼畜管理	幼畜用小屋			66・67 で 1 枚の原稿用紙			
67		幼畜管理	幼畜用小屋			66・67 で 1 枚の原稿用紙			
68		幼畜管理	貞操帯						
69		家畜の種類	焼印					◎	
70		家畜の種類	耳印						
71		イヌ	えさ箱					○	

「図譜」番号	追加番号	「図譜」タイトル	図版内容	原画なし	和崎関連	分割	統合	梅棹製図	備考
72		牛車	車輪固定車						
73		牛車	車軸固定車						
74		牛車	水桶車						
	補 21		部品詳細						スケッチ
75		役牛	くびき						
76		役牛	鼻環						
77		役牛	荷物用鞍						
78		役畜としてのラクダ	車引き用鞍						
79		役畜としてのラクダ	荷物用鞍						
80		鞍	騎乗用鞍						
81		鞍	鞍の構造						
82		鞍	あぶみのつり方						
83		鞍	革ひも						
84		手綱	手綱						
85		鞭	鞭					○	
86		足かせ	足かせ					○	
87		汗とり	へら					○	
88		汗とり	ブラシ					○	
89		汗とり	へらとブラシ					○	
90		ラクダにのる	ラクダ騎乗用鞍						
	補 22		ラクダはな木					○	論文「ラクダのはな木」の図 1
	補 23		ラクダはな木					○	論文「ラクダのはな木」の図 2・3
	補 24		ラクダはな木					○	論文「ラクダのはな木」の図 4
	補 25		ウシの口がせ						論文「ウシの口がせ」
	補 26		ウシの口がせ						論文「ウシの口がせ」
91		旅行	テント						
92		旅行	証					○	
93		旅行	水筒						
94		旅行	小型桶					○	
95		ラマ廟	ラマ廟		借用 1990			○	原画に亘のサインあり。
	補 27		柵						同上。
	補 28		門柱						
96		フェルトづくり	はさみ					○	
97		フェルトづくり	弓						
98		フェルトづくり	補助道具						
99		フェルトづくり	棒			99・100 で 1 枚			
100		フェルトづくり	補助道具			99・100 で 1 枚			
101		フェルトづくり	やっとこ			101・102 で 1 枚			
102		フェルトづくり	棒			101・102 で 1 枚			
	補 29		フェルト製造機						
	補 30		革なめし道具						
	補 31		皮革加工道具					○	
103		ヤギ・ラクダの毛	くし					○	
104		ヤギ・ラクダの毛	紡錘車					○	
105		狩猟	鉄砲				原画 2 枚		
			鉄砲の詳細				—		
106		狩猟	とらばさみ		模写 1945				

◎は左右反転